ブラジル人移民集住地域における地域住民の交流に関する研究

―群馬県大泉町のフットサルクラブを事例に―

スポーツビジネス研究領域

５０１１Ａ０５２－３　鄭　舜圭　　研究指導教員：武藤　泰明 教授

Ⅰ．序論

1989 年 12 月に改正され、翌年の 1990 年 6 月に施行された出入国管理及び難民認定法(入管法)を契機に、多くのブラジル人が来日するようになった。この改正された入管法では、「定住者」ビザが新設され、日系 3 世とその配偶者までが制限のない形での就労が可能となった。入管法の改正から 20 数年が経過し、2008 年のリーマンショックや、2011 年の東日本大震災により減少傾向にはなったものの、日本におけるブラジル国籍の外国人登録人口は 2011 年末時点で、約 21 万人にも及び、中国籍、韓国・朝鮮籍に次いで第 3 位になっている。

また都道府県別・ブラジル国籍人口(2011 年末時点)では、愛知県：約 5 万 5 千人、静岡県：約 3 万 3 千人、三重県：約 1 万 4 千人、岐阜県：約 1 万 3 千人、群馬県：約 1 万 2 千人となっており、ある特定の都道府県に人口の偏りが見られる。

その中でも特に、静岡県浜松市と愛知県豊橋市は、日本で最も多くのブラジル人が暮らす集住地である。さらに、本研究の研究地である群馬県大泉町は、ブラジル人を主とする外国人人口比率が全国で一番高い市区町村であり、2012 年 10 月 31 日時点で、外国人人口比率は 15.4%に上る。

このようなブラジル人の増加を背景に、日本ではブラジル人移民の研究が盛んに行われるようになった。

Ⅱ．先行研究

当初、ブラジル人たちは一時的なデカセギを主な目的として来日していた。そのため研究者たちも、彼らはある期間日本で働いた後、本国ブラジルへ帰国する人々として捉えていた。現在でもこのような目的で来日している人々は少なくはない。しかし、この傾向には徐々に変化が起こり始め、日本で永住を決意し一戸建ての家屋を購入する人々や、日本生まれの 3 世や 4 世が増加しつつある。

渡辺(1995)はブラジル人急増の当時の日本人とブラジル人の関係について、「ブラジルの生活様式を可能にするような状況によって、ブラジル人は日本人とあまり接触することなしにブラジル人同士で、またポルトガル語のみを使用して暮らすことが可能になった。」と指摘し、また「実際、職場の場面を越えて日本人と個人的な交流をもっている人はほとんどいなかった。」と見解を示した

近年の両者の関係について、小内(2009)は「日本人にはブラジル人の実像が見えにくいままである。日本に住むブラジル人に生じている変化を把握している者は、研究者を含め、それほど多くない。」と言及した。さらに、小内は「在日ブラジル人が日本人と現実にどのような関係を取り結んでいるのか(中略)、といった研究は少ない。」と指摘する。つまり、現在に至ってもなお、日本人とブラジル人は必ずしも良好な関係を築いているとは言えないと考えられる。

また、移民研究におけるスポーツ分野の研究ついては「総じて研究が少なく、戦前の日系人バスケットボール・プイーヤーについての論文(水谷豊[2000.3])や、二世野球チームについての文献(永田陽一[1994]など)などいくつか出されたが、まだまだ開拓の余地のある分野であるといえよう。」と指摘した。

また、都築(2002)が指摘する「外国人労働者の急増に伴う地域社会の変化や従来か

ら居住している地域住民＝ホスト住民に与える影響といった側面に関しての検討が不十分であり、物足りない」という考えから「外国人労働者を『移動を繰り返す一時的な【出稼ぎ者】と捉えるだけでなく，定住化しつつある新たな地域住民として把握することも必要』」という見地に立ち、「外国人労働者の流入と定住化が，地域社会にもたらす影響を明らかにすること」が重要となる。新たな地域住民であるブラジル人(＝移民である地域住民)と、ホスト住民である日本人(＝従来から居住している地域住民)の間で、どのような交流がなされているのかについて、明らかにすることが重要であると考えられる。さらに先行研究で蓄積の少ないスポーツ分野に当てはまるフットサルクラブを事例に取り上げることも、研究の価値があると言える。

Ⅲ．研究目的

本研究の目的は、群馬県大泉町のフットサルクラブにおいて、ブラジル人と日本人の間に、どのような交流がなされているのかを調査することとする。

Ⅳ．方法

群馬県大泉町におけるブラジル人の集住の歴史について、著者が現地の役場に赴き、その歴史に関する資料の収集と聞き取り調査を行った。大泉町のフットサルクラブの歴史については、その詳細で正確なデータが存在しなかったため、フットサルクラブの経営者へのインタビューで、情報を収集した。また大泉町におけるブラジル人と日本人の交流に関しては、関係者へのインタビューを通じて調査を行った。

Ⅴ．インタビュー

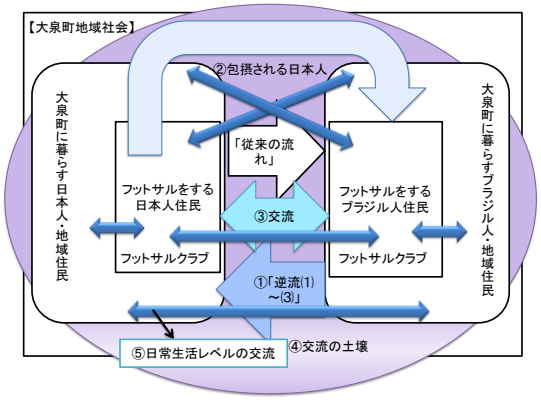
本研究では群馬県大泉町に所在するフットサルクラブを研究対象とし、本フットサルクラブに関わりのある人物(フットサルクラブ経営者１名、保護者１名、スクール生２名、トップチーム選手１名)と、大泉町観光協会の人物(職員２名)を調査対象者にした。

また、半構造化インタビューを採用し、インタビューの際には、事前にインタビュー対象者から許可を得て、ボイスレコーダーで録音した。またインタビューは 45 分～1 時間程度実施した。

Ⅵ．結果・分析・考察

本フットサルクラブにおけるブラジル人と日本人の交流は、下記(図③)で示すように表すことができた。

(図③)群馬県大泉町のフットサルクラブを舞台に見られる日本人とブラジル人の交流



まず、日本人がブラジル人を包摂する「従来の流れ」の交流ではなく、ブラジル人が日本人を包摂する「①逆流」の交流の存在が、大泉町の本フットサルクラブで確認された。そして「②包摂される日本人」が現れ、ブラジル人と「③交流」を持つようになる。さらに両者は交流を通して、様々な局面や場所でのより良い関係を築く「④交流土壌」を獲得する。その結果、大泉町におけてブラジル人と日本人が「⑤日常生活レベルの交流」の機会が得られる可能性を示唆することができた

Ⅶ．結論

ブラジル人移民が設立した本フットサルクラブでは、移民受け入れ国・地域の日本人を「逆流」の交流という形で包摂した結果、両者の間で交流が生まれ、そしてその交流が「日常生活レベルの交流」にまで転換される可能性が観察できたと結論付けられる。